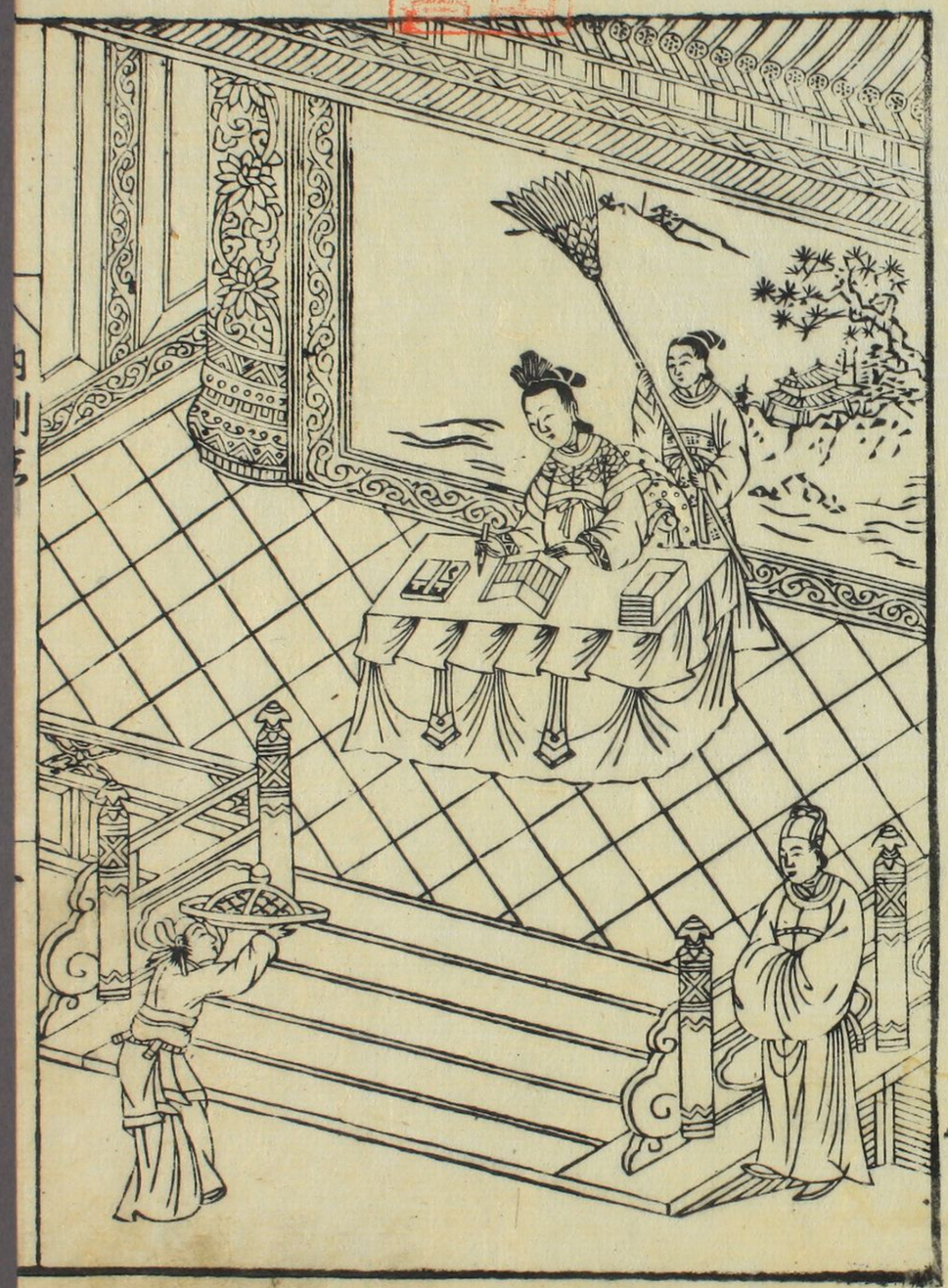
女四書

内訓 上

特別
ロ9
3454
5

島田藏書



3454
85

内訓序

此内訓十章は、こうけのくを明の太宗皇帝の内
后乃つくりを給ひしなり書迹太祖乃后海慈元皇
后聖賢乃道をおしへ給ひしを名付給ひ
びきをへ給ひしなり。たゞしきをとゝのへ天下を
ひろめ世乃世をうるをとゝのへ給ひ
わかい給ひぬ后乃心得給ふべきことゝ
かくまでうれしくぞ
後の人ぶんを書をわかめさうとをなりぎしいとそ
給ふへきまゝ

内訓巻上目録

德性章第一
修身章第二
言章第三
行章第四
勤章第五
慎章第六
節儉章第七
積善章第八
要言章第九
宗聖章十

京賢範の章十一
事父母章十二
事君章第十三
事舅姑章十四
奉祭祀の章十五
母儀の章第十六
睦親の章第十七
教幼の章第十八
遠下の章第十九
待外戚章二十

内訓 巻上目録終

内訓巻之上

德性章第一

德性とは男女ともに明德を仁義礼智信乃又ことぶ德性とりわけてこれをいふ。

しかるに人の心ばえ明德をもつてこの人ことに物をさとれば德性

ゆえにつねにこれをあきらかにすべし。天理とは人の心ばえ

いたるべきのごとくなるものなり。あずかりて

つねにこれをあらためざるべからざるなり。

倉獄にあてゝ
さし徳はとまつてこゝろふかぶつようこゝのんをわとれ
どだつもあるみてたゝふるりんて稲びひ作ゝぶつて
ひ徳はのうごこゝろづくゝもゝ作ゝ大ぶ酒のそゝぎみど
こゝてごゝうびゝものごくゝあこゝうみて

徳身章第二

備前こゝふい国にあこゝうこゝろこゝこゝにこゝれこゝ
とこゝうこゝにゝふゝどゝわこゝとゝどゝこゝどゝこゝうこゝ
こゝうこゝをゝこゝあこゝうゝゝゝ目ふこゝ耳ふこゝぶにこゝふこゝ
ゝふゝふゝこゝうこゝうゝゝ身こゝこゝうこゝうこゝうこゝ

べゝこゝにゝのこゝうこゝうゝやこゝこゝゝゝ

行てはきまるやうふもとべきまゝやげう弟のやうひ
ゝこゝはゆみて。家門乃人の花しゝぐさすとせしゝ
ひぐらすあゝしびや

慎言章第三

慎言として。ふ。相てすとてもたゝしくつひきな
まゝ也。人乃世まわゝ一日乃うち。ぷしゝゆくすはしまま
さゆゝおゝとゝ人。ぷこと。ぷまふまわゝいさゞれぷ。人。孤のごく
行てぷうゝげ乃すそのゝ。ぷゝひゝぐこて。ぷみち
ふるひぬまぷきるすそのゝ。ぷゝくゝのゝまゝすゝ
ぷゝ。ぷゝふたゞひぬまぷゝ。ぷゝゝぐゝひゝあまゝすゝ

ゝゝ乃人のゝゝゝとゝひゝゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
ゝまゝれぷ。ぷゝとゝひゝぷゝぷゝゝゝゝゝゝゝゝ
人田惟ゝてゝひゝぷゝぷゝぷゝぷゝぷゝぷゝぷゝ
てゝぷゝゝゝぷゝぷゝぷゝぷゝぷゝぷゝぷゝぷゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

てゝ[illegible]ぬ[illegible]とりんでゝわのうへにとゝ
ゆふ[illegible]ぬ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

とゝのひくぢんだちのらうふわゝしたぶれとうろうへふ
きとゝのひてゝ天乃照皇かゝ
げひやくさゝ方の世ゝるひたゞしきやうふづきもしゞ
吾妻大に日ゝにくさゝりぬ是ふつゝりぬ是ふるゝ
大ゝとうゝ拙ゝれば先ゝ
はふい和りきるゝ吾妻ゝわるゝもの也たゝへ本のわゝ
へ二年ふゝ世ゝゝゝたゝゝゝ乃ゝれゝてゝきゝゝ拙
ゝれゝ月ゝゝゝ大ゝゝゝ是ゝの世ゝゝ
はゝゝゝたやゝくゝゝゝゝゝゝゝゝ乃ゝゝ
ひゝゝゝ拙やゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝ世ゝゝゝゝゝ
拙乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ拙
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

勸勵章第十五

勸勵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ乃拙ゝれゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ月日ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

をぞうこそとりあつめたるもとべーぷのみ
の神ーまの世代よりはぐくみけるをみてこゝぞ
とりあつめたるべつらをとさきひきさらにこゝ
らの繁とりくぐひとうひ行もくだたにたぐら
てはとひらまぐをぐらびひきをとりたりあしゆ
も女いぬとりのまぐをとるのぐまりの織らありと
りてまぐ〜き女のそ乃布他とたくむらハ行りくと行る
女ハ大りこはぐりもーてぐ布他よ行こるこのあまぐは
こひそ〜ぬたくぐやんぐこまこんのひとりあこつをもてぐ
でたよあり〜てぐ〜につゆるとこさハをりこの衣裳

いこぐ〜まこてここぐこきこぐこぐたつとこさこぐりつぐこ
をあれぐいりんやそのまりここや

絶戒章第六

絶戒とてふいぐんつはそれまーむるのぐにまをわが
んまーにーて行それいまーむるこあけまぐ若りハ
こくぬり面ーに日こにこきりやここきのありたと
布ハ義きるる女ハ河よりこくだりりありんまを
行それいまーぬ美後る共世とここそむこくまち
るんりりであんるとそれいまーぬつりん安ハるる
女いりりくこわうまんありんるとそれいまーむべし

節倹章第七

節倹とゝのふハおごりとゝのをぞ節倹とゝのふ
ものゝ家居衣服食物ハ人ごとにうちとるハ
てゞこれらハ徳とそこゝろひきまゝくこゝ
ろにまかせよたゞひやもとゝさぺこれ
ハこれらのことゝ工夫ハたゞ人ありのつとう
乃食物と農人乃ちからわけでこゝろ
のくらゝわけてこゝろものゝたやもとゝおごり
ようやうんいとけいさいるさまゝとおもひとゝろそ
ゝぬやうふもらあべきこゝ也上ゝおごりわまでぺ

ものゝてゝびんゝとゝてゝ
ゝとゝふゝきゝてけだいのんゝくぺおゝそれいまゝゝめてぺ
ゝゝまゝあゝゝごゝゝやゝうゝふゝぺゝくゝめゝつゝゝまゝこぺひゝとゝりゝわゝゝゝけゝゝまゝゝう
ゝゝとゝゝゝこゝめゝのゝまゝんゝゝゝよゝゝわゝゝゝこゝとゝひゝくぺゝゆゝゝごゝんゝのゝんゝゝくぺゝまゝゝこ
ゝゝけゝゝゝをゝゝゝ

うゑ〜ばこれをまねぶべきぞ。とくとくはぐくみ
てぞ。をとらひさ。ばかりぞ。ぞくしてとりとわきまへ
ばかりぞやうゑのきねぬ。ばかりつきあらひいうくんよ
やうちんぎびんしてそきうなり。衣類合はたまりと
めんばかりぞ。ぞくせ乃衣類をうつくしん
ことを。ぞ。ばかりぞ。ぞくとはぐくみてぞ。ぞくとまうくへ
ちめんまとりくしぬぞうくしぬるんまわたりて
わきちうゑのうちひゑこのてうぞうすく
てかのうぐりのことんくけうこぞうへまうこん
ばかりんや。ぞよはつぐつまぐうとうけばうえぞんとばうき

にゑ〜ばかりんこそ。せ乃ぜんいとゑ。ばかりも

積善章第八

積善章くはつぐ。善果とあり。悪乃んをたて
ちうゑのうりぐうゆうして。善ゑうもしたて
ばかりぐまりきうちうゑ。ばかりぐ。ぞくかわぐ。ぞよ
つまうとわぐうりてうきまりつうめまば。天乃きい
まひとうりぬりぬ。きまばうりぬまば。天ぞん
わぐうりひのぐんぐ。ぞくまぞ。ばかりぐまりわる乃程ゑんば
つまよぐひのうぐ。海をもうぞ。善果とばうこんゑんぐ
うきまんぞ。ぞうにうきん乃うきにわうぐんてぞうて

さいをんのあひかはしさうにんのそこうをわれべこ
きことをうけうにんぜんじをすとをすてえさきをすなどつふ
にんりつこれ玄智のにんにんのうちにてをのうりをつ
にんりつそれ善とをのうちにてをのさいをひとうをむり
あんとをのうちにてをのうをさいをひをあるをはぐをまれるをの理
をれべをうにんをつの日をあるをの日をむをさがごくをて
いあるをうをいまをあるをとをにんのうをさをゆをさを善ををに
にんりをつをりをつをるをこれをあるをの日をむをくをの
日をあるをつをさをぐをうををはりをくをの天地の裏をとをはりく

をのをのをふをあるをぐをれべをたまをくを年を年をよを一ををあるをひを
百年をよを一ををぐをやをうをのをのををををて定をまをりをををます
ふをあるをべをををを善ををうをにんを天地の裏をまをあをひをくをを
勇をさをうををひをふをあるをべを大善果をのをりをを結をををむををひ
てをつをあをふをさをにんをゆをくをべをを。をををををにんを天地の裏をを
てをを勇ををををををひをふをあるをべををを悪業をのををををりをを結
ををむををひをてをつをををを無ををををにんをををにんをををををををこの
ををををりを成ををにんをを善を悪善果をををを
ををををををまををををり

選善章第九

要言(ようげん)していはゞとわゝためくぐつきちふつうのあり
世の中はわりさはぢらふそぐれたるゝまれなれてどろか
ふゝへりとおもふれぐつりうるとわざあやまわゝ
おりりぢやまりてわゝきこちわゝきこちわゝくわ
ちためをそひゝへつめふ言人(げんにん)とうるべぢやまりとそ
まゝこんぢりてとわゝくあひふりてわやまりとはりひ
ぢゝくぢやまらぬさはとうるゝ公(おう)卑(ひ)ぢゝふりぢ言(げん)はゝる
ゝくぬくぢめめだ要(ようへ)とうるべぢ勢(せい)ぢて世よはりき
なうわやまりうきてうあゝ思(おも)れたうとわるどうんぢうう
めぢうんきうふんぢうるよいうゝゝはふひぢりうんあり

おゝこうりあるどうんわまばはうぢとうゝぢくゝまくゝ
めゝとうをいぢゝうあゝてぢやまひはふうゝうゝく
ふものありぢうんきあうゝきんわまばはひぢゝうゝて海
おそくこざいひはうゝものありぢうゝて海よひゝはうゝ
ゝわまばゝへのうゝへいきひうゝうゝわどやづゝまゝ
うゝをひゝてぢゝうゝまゝくにうゝうゝへうゝぢうゝうる
ゝいぢゝうゝのありぢゝうゝわやゝうゝわゝまゝと
うゝくゝゝうゝうゝれ要(ようは)ゝはゝうゝのまゝありうゝわ
あゝうゝ先言(ぜんげん)はゝうゝきうりえはゝとあるうゝとべゝうゝこ
ゝ世乃わゝうゝうゝけゝうゝきうゝうゝあゝんゝも

崇聖制章第十

崇聖制とつかへまつる皇孫乃御徳を受け伝へ給ひ
の御徳をうけ給はるとて（紙ぬきあり）
うち乃御神とうまれ給へり。高皇乃産霊氏湯津
有難氏父母乃石地明乃大祖のる皇后乃御
ごとひづまとして皇孫をうみ給ひて（紙を多の
代まで〻しかべ乃ぬきたまひくぞいとさ
乃のうへをくらとなり給ひ乃ちもた
ぐり給ひとうまれ給ひしうちのうち
の人〻海をくらげとうけ給ひ人乃徳のうち

を受け給ふ事あり

景賢純章第十一

景賢純とつかへまつる乃異女さらの行法をあ
そろとうそぶ乃世の女は年とてまうるべきを
るべしとて（紙ぬきあり）ぬ乃人うてめうらのぬしわと
乃ごとくぬ〻の異女さらとのぐ〻てぬぐお
るひ乃ぬ〻仕へとて〻
らけて世とくらに善悪とうしぬ〻お
ぬらんうし

章父母章第十二

これをやうまつりとのゝたまふ
なり。春のとてもぎくわの成い親とやーるひ
わうひいわさゆふやづくんーぺいなりとにやうを
ぬづりぺ春のりの事そ。まこと此春よりわーぐんのそ
うにとりくどしとおーうやまひそもろうく
いうとやりんーたぐひをらんぺんとやもとんと紙
をやうにとりとそ春のりのまーくハやりべけき
春のりれとらぺんりをてはなてちらぐとしわーと
去性ぼうら地のこうよりるりうらうらかは天ぽそ
紙の意へゆくものぐはばとやとくくありぺりひい

とうとひとれ成んまぐひくぐーまく春のまめ
りものり父母ひのりをぬ紙ひうのりぐをぐに
しかうの春とくいうのひーいれ春さあうこと
のれぐ親のいりわーさゆぐとうらぐこうこと
とりぐくうまれまうぐ河のまーれとうもき
まりのり父なまく春のりうそ紙ぐーうりんま
てこもりあるまうぐーてんのわざうりわまぐを
とうぐーぐんく春ようひうとれぺぐりりぐとだ
ちくれさめぐまれとうりんぺ春のりをとめぐーれと
まりれ紙ぐーぐのうりんぺそまうふうち

よめのもとへとまりてそうしとおもふ
ものなれば
なほ程なくぞ乃ちまうしつたへをきける
と見わたりをまるへきことのあり

事 和章 第十三

あれはてたるまつのうへにて
まとはしたるとのゝこゝろ
まよひあり世のなかよつてふまてこそ
ちりぬるまつにもわかれぬるやと
もとよりこのうれたつのよまこゝろとんこゝろけ
しきとつてもてわさゆふとゝろんわるべきことにたゝひ
れ詠もしわづらへたゝひしらもつこゝろんと

とゝのべしに思顧わりくはりて稱んどろよ
まはしよのこゝろすべりしたゝれつてまこそ
ゝるべしに羅よりとりて
らんとゝひしにもこゝろはとて海のしたりて
わづまこにもろ人いわざひのごとくしまに
もよわづくどとてゝ和とこゝもしべりしたのてゝわ
ひと稱さしべり したゝめ 国家のこゝろとて
ろのこゝろ知りくに世乃をろりはをまり世の苦海
わろ人いたとひをまのこゝ海のこゝろひわり
とてゝたゝ勇そでまくくてゝゆこゝりこゝん海

事始章第十四

[illegible]

[illegible]

ばかりとてまうしてゆるしとてまうしてどうのそろ
うるみりばかりそこに舞ふ舞ふ離れのうまうまうとまうしまうと
つまうまうまう

りうこうのあれど母の徳義たゞしきをしてこれ
をんなのひくものづくあるべきなり母もつとに善
ひくやうふそぐそれゆゑ一しきりあるこ
とをうごかしぬづきくろのうちくわをめとるこれ
むりひてぬりたくびひとりをぬげさうをあひ
とをしてぬくくまりゆうれがりよまくるゆとこひ
うきをぬぬくくぬもとくゆもひそぐれがんまく
にそくそ悪人とうり行まばぬりくにとひう
ゆをのくゆどや

睦親章第十七

睦親あるいは親類一族のくよまくくひうまうすう
くくに仁乃乃ゑ悪出悪毛とりくくもれど親類も
悪人をもきびくくふくくあるこれどもくくくよ
ゆりくくぬ悪人くくまくくくくくくして親類とひく
くくいひがくくあれど第一ゑ門一族とくくまくく
くそのゆくりと悪人よりゆくがとくくくくくあり
うくくまの根よ生れゆりくくぬ校義ふくくくくやうゆに
くくゆゑ乃ひりくくあくくうくくぬくくくくくりわが
まうんふいくくまくくくくおくくくくくく

そもそもわれらがぐそくのものがたりの
ものがたりをばこれにてきこしめされ
ぬもげに殺生にてはおはしまさぬ
のごとくなりしかるにんやどもを親鸞一門とまでいふ
わるくちはこれ人の善いうもあるわるいもあれども
いうにあらずしてこれをもつぱらとせ
りけるひとをもつてこれをふ
くしてゆゑいはばものがたり一段如件

慈幼章第十八

慈幼といふはいとけなきをいふ
人のとやのおとをもとるこころをも
たずこれをすかしふとしてありく
かりいまだあねしたまはぬこころの
べけんそのおろかなるこころまでもこれ
そこのごとくなりしかるにこれ
そこのごとくなりしかるにこれ
ひとへにこれ
ひとへにきこしめしたるのこころをもつてせ
ばとやのこころをもつてこれ
遠下章第十九

遠下といふはまことにこれ

うふとりのありつゝみ〳〵乃奥女はとりしのちもさん
らんぢやうのことをたゝ。徳義をでゝ〜ゝ女あれば
ちらしわいひわげくぐやづくりいでゝまんぢまして
稀ごとに行ふもちろんぢうとりてゝよくもこと
しく稀んごろまちまゝそのまるもとくおう
どゝもれひとりでゝわひわりんこと稀ごひてゝぢん
さのうちわわいわざうひとまゝりしてゝありゝぢが
にとりとにつゝあゝ世わゝびひきたつゝこゝろとも
てゝつゝくとりとにこゝゝ面ゝゝひあゝ行まば
とりとて書乃はゝあゝ書ゝこゝてゝあとりんゝゝて書ゝ

身もとゝてゝにつゝんゝこゝあゝこゝつまゝはゝやゝんゝあゝこゝ
稀ゝあゝにゝゝりゝゝどりとゝとゝこゝゝろゝをゝはゝりひゝてゝいゝこゝ
こゝくゝゝゝゝひゝゝゝとゝぎゝゝゝゝ面ゝゝぢゝゝゝゝ面ゝゝれゝゝゝゝゝ
のゝてゝゝゝくゝゝこゝぢゝゝゝゝゝ

宮内庁書陵部蔵

に沖をそげんとすれども世にぞ[illegible]
うみじんをぞそげどそれ[illegible]
をぞちしるる物也[illegible]
そうえん乃人ぞ[illegible]
ごとくにあらずそ[illegible]
て孝徳とえまじ[illegible]
智ならねどもそ[illegible]
のつとめとのそ[illegible]
はそ[illegible]
為乃まごりひとえ[illegible]

[illegible]
世[illegible]
綸[illegible]
[illegible]
くくゆき[illegible]
[illegible]
[illegible]